



三重県内の2つの病院の医療再生

城西大学経営学部教授 伊関友伸

NHK「ナビゲーション」に ゲスト出演

5月25日の夜7時半から、NHK東海・北陸地域対象の「ナビゲーション」という番組にゲスト出演した。特集のタイトルは「町から医者がいなくなる」。都市偏在が進み、相変わらず深刻な地方の医師不足の現状とその解決策について、もう一人のゲストの三重県南伊勢町の出身の磯野貴理子さんと考えるというテーマであった。番組内のビデオで紹介されたのは、三重県の志摩市にある国保志摩市民病院と津市にある県立一志病院である。

医師不足に苦しむ志摩市民病院

最初の志摩市民病院では、深刻な地方の病院の医師不足の状況が報告された。志摩市民病院は、2008年に大王病院と前島病院の2つの自治体病院が統合された病院である

が、統合時に7名在籍した医師が、2016年3月には1名となってしまふ。大幅な財政赤字を記録して、病院の先行きが不透明な中で、当時、1人残ったのが江角悠太医師であった。三重大学医学部出身の医師で、当時34歳の若さで院長となった。院長就任後も常勤医師が1〜2名の状態が続き、入院・外来・救急・当直などを、ほぼ一人でこなしている状況が紹介された。江角院長の「この地域の医療は」あまりに不安定で、心許ない。死んでも死ねないのが僕ですよ」というコメントが印象的であった。

三重県立一志病院の研修体制

次に、地方の医師不足問題の解決のカギとなるものとして、研修体制の充実を行って若手医師が勤務する病院として県立一志病院の取り組みが紹介された。県立一志病院は、津市の山間部にある病院である。交通不便地にあり、過疎高齢化が進んでいる

ことから医師不足に苦しみ、経営も厳しい状況にあった。2007年度より三重大学家庭医療学教室から総合診療医の派遣を受け、現在は四方哲医師が院長となり、地域医療、教育、研究の3つを主軸とした活動を行っている。番組では、若手医師や医学生が病院での診療や訪問診療を通じて研修をする様子が紹介された。一志病院ではこれまでの10年間で受け入れた医師は、後期研修医26名、初期研修医65名、指導医21名に及ぶ。研修を行った医師は、現在、三重県内や全国の地方の病院で活躍しているという。

番組内で、磯野さんがへき地の医療現場で働く医師たちについて感心されて、「偉いですね」と感想を述べられた。筆者は、医師たちはつらいのを我慢して仕事をしているのではなく、仕事を通じて学ぶことができ、社会問題を解決している満足感がある、医療を行っている。地方の病院は、研修



「伊勢えび祭り」での記念写真（限取りをしているのが江角院長）

体制を充実させるなど、働きがいのある勤務環境をつくるのが大事という話をさせていただいた。

会議で2人の院長にお会いする

たまたま縁あって、テレビのオンエアの一週間後に、全国自治体病院協議会の近畿・東海地方会議で2人の院長にお会いする機会を得た。江角先生と志摩市民病院の職員

は、会議運営を担当する三重県支部の支部長病院として会議を仕切っておられた。懇親会の余興で、職員有志が翌日の6月2日に行われる「伊勢えび祭り」で「じゃこっぺ踊り」を披露した。懇親会の参加者である各病院の院長・事務局長も一緒ににぎやかに踊った。踊りを終わってのあいさつの時、有志職員の職種が紹介されたが、メンバーの中に医学生が3名参加していたことが、参加していた院長・病院長の感心を呼んだ。本番の祭りでは病院は「志摩市商工会賞」を受けたという。写真は祭りでの記念写真である。限取りをしているのが、江角院長である。正直、病院は医師1〜2名でいつ廃止されてもおかしくない病院なのであるが、江角院長を先頭に、多くの職員が病院再生に向けて懸命に努力されていることに感銘を受けた。

会議では一志病院の四方哲院長にもお会いした。四方院長から、地方の病院で不足する看護師雇用対策として、2016年10月に、病院に「三重県プライマリ・ケアセンター」が設置されたこと。プライマリ・ケアセンターは、地域でプライマリ・ケアを実践できる医療従事者等を育成することを目指し、看護師について「プライマリ・ケアエキスパートナース」の養成を目指すこと。一定の基準を満たしたプライマリ・ケアエキスパートナースは、三重県知事が認証を行

うこと。多くの看護師の関心を集めていることをお聞きした。

地方の病院の医療危機は現在も続いており、より深刻になっている。三重県の2つの病院の医療再生の試みは全国の病院の参考になると考える。

三重県プライマリ・ケアセンターHP

<https://www.hosp.mie-u.ac.jp/sosnin/>

primarycare-centor-mie/

タイトルの「アスクレピオスの杖」とは、ギリシア神話に登場する名医アスクレピオスの持っていた蛇くす（ヘビ）の巻きついた杖。医療・医師の象徴として世界的に広く用いられているシンボルマークである。

筆者プロフィール

伊関友伸（いせき ともとし）

1987年埼玉県入庁、県民総務課、大利根町企画財政課長、県立病院課、社会福祉課、精神保健総合センターなどを経て、2004年城西大学経営学部准教授、2011年4月同教授。研究テーマは、行政評価、自治体病院の経営、保健・医療・福祉のマネジメント。総務省公立病院に関する財政措置のあり方等検討委員会など、数多くの国・地方自治体の委員等を務める。著書に「まちに病院を!」（岩波ブックレット）「自治体病院の歴史 住民医療の歩みとこれから」（三輪書店）などがある。